

失敗を恐れるのは「褒められた子」。脳科学者が語る「褒めて育てる」危険

「褒めて伸ばす」が子育ての基本となって久しい今、子どもに厳しく叱ったり苦言を呈したりすることに難しさを感じている人は少なくないでしょう。

しかし、脳科学者として知られる中野信子先生は、新刊の『空気を読む脳』の中で、「褒めるは危険」であると次の様に継承をならしています。

「褒めて育てる」は正しいか？

「いつも『いい子だね』と伝えて育てることで、自信に満ちあふれた幸せな子どもに育ちそうな気がするでしょう。しかし、このやり方に『一度も違和感を持ったことがない』という方は、意外と少数派なのではないでしょうか？」

そう中野先生が語るように、「褒めて育てる」教育があまりに流布していることから、厳しいしつけに抵抗を感じている人は多いはず。とはいえ、「こんなに甘やかしてばかりでいいの?」「しつけと甘えのバランスがわからない」という悩みも絶えません。

しかし中野先生によると、悩める現代の親にピッタリの実験がすでに 1990 年代にアメリカで行われており（コロンビア大学のミューラーとデュエックによる研究）、褒め方によって子どもたちのチャレンジ心や態度がどのように変化するかがわかるといます。

ここまで「褒めて育てる」が浸透しているからには、ベタ褒めした子が難しい課題にも果敢に取り組むはず、と思いきや、実験結果が教えてくれたのは驚愕の事実でした。

実験内容を簡単に説明すると、このようなものです。

10 歳から 12 歳までの子どもたち約 400 人に知能テストを受けてもらい、実際の点数は伏せた上で、「あなたの成績は 100 点満点中 80 点だ」と全員に伝えます。

そして子どもたちを 3 つのグループに分け、成績以外に子どもたちに伝えるコメントを次のように変えます。

その後難しい課題を選らなかった割合

- グループ 1 「本当に頭がいいんだね」と褒める。 → 65%
- グループ 2 「努力のかがあったね」と褒める。 → 10%
- グループ 3 何のコメントもしない。 → 45%

さらにその後、子どもたちに誰でも解けるようなやさしい問題と、難しい問題のどちらかを選んでもらい、チャレンジしてもらうのです。

「褒める=能力を伸ばす」と考えると、「本当に頭がいいんだね」と褒められたグループ 1 の子どもたちが自分の能力に自信を深め、難しい問題にチャレンジしそうですが、結

果は真逆だったのです！

難しい課題を避ける褒められた子

難しい課題を選ばなかった子どもたちの割合を表にしたものが、上の割合です。この結果に対して中野先生はこう分析します。

『本当に頭がいいんだね』と褒められたグループ1の子どもたちは、何も言われなかったグループ3の子どもたちよりも、難しい課題を回避した子どもの割合が高くなりました。褒めることが自尊心を高めると信じてきた人々にとっては、衝撃的な結果であると思います。

『頭がいいね』と褒めたことによって過半数の65%がやさしいほうの課題を選び、難しい課題を避けたのです。『頭がいいね』と褒めることが、子どもたちから難しい課題をやろうとする気力を奪い、より良い成績を大人たちに確実に見せられる、やさしい課題を選択させるという圧力として働いていたと考えることができます。

さらに衝撃的なことに、この難しい課題での自分の成績をみんなの前で発表させたところ、『頭がいい』と褒められたグループ1の子どもの約40%が、本当の自分の成績より良い点数を報告したのです。つまり、グループ1の4割の子どもが自分を良く見せようとしてウソをついたということです。

ちなみに、何も言われなかったグループ3では、ウソをついた子どもの割合は約10%でした

褒められた子どもたちは難しい問題を避けるばかりか、「頭がいい」という自分の評判を落とすことを恐れ、ウソをつくことも厭わなくなる可能性が高い……。

この実験結果が「褒めて育てる」ことへの警鐘であることは間違いないでしょう。

優秀な人による“捏造”と“改竄”

さらに中野先生は、実験者のミューラーとデュエックによるグループ1の子どもたちへの見解を次のように教えてくれました。

- ・「頭がいい」と褒められた子どもは、自分は頑張らなくてもよくできるはずだと思うようになり、必要な努力をしようとしなくなる。
- ・「本当の自分は『頭がいい』わけではないが、周囲には『頭がいい』と思わせなければならぬ」と思い込む。
- ・「頭がいい」という評価から得られるメリットを維持するため、ウソをつくことに抵抗がなくなる。

「この研究のことを思うとき、ふと、『頭がいい』という褒め言葉に直接的にも間接的にもさらされ続ける環境で教育を受けてきた『優秀』な子どもたちは、日本で今、どのようなポジションについているのだろうかと考え込んでしまいます。

“捏造”“改竄”“記録の紛失”“記憶違い”が頻発するように見える昨今ですが、これらはしばしば安直に指摘されるような、劣化、などという現象ではないのかもしれない。

もしかしたら、捏造をしたとして多くの人の口の端に上った社会的地位の高い立場の人、あるいは上級官僚は、周囲から、『すごいね』『頭がいいね』と褒められ続け、そんなふう to 育ってしまっただけなのかもしれないのです」

挑戦を厭わない心を育てるには？

では、どうすれば子どもはチャレンジ精神を身につけるのでしょうか。中野先生はこんなヒントをくれました。

「たしかに褒める教育で育てられたはずの若い世代は、もっと自信を持って積極的に困難に挑戦する人が出てきてもよさそうなものなのに、かえって慎重になり、上のどの世代よりも保守的になっているように見えることすらあります。

褒め方には注意が必要で、その子のもともとの性質ではなく、その努力や時間の使い方、工夫に着目して評価することが、挑戦することを厭わない心を育て、望ましい結果を引き出す、と研究チームは結論づけています」

挑戦をした子どもの姿をしっかりと受け止め、その努力を認めてあげること。手放しに何でも褒めるのは簡単ですが、子どもの工夫を発見するには、親も努力が必要です。

児童心理アドバイザー、保育士

学校法人長沢学園 理事長